

# 勝林寺寺報

**解脱**（げだつ）の光輪（こうりん）  
**きわもなし**  
**光触**（こうそく）かぶる  
**ものはみなまふ**  
**有無をはなるとのべたまふ**  
**平等覚に帰命せよ**

正信偈和讃第三首目です。  
「解脱の光輪」とは、如来さまの光りの「輪」です。お釈迦さまのお説きになつた真理である「仏法」は、ちょうど戦車が草木や土砂を踏み碎いて進むように、いろいろな誤った見解を打ち破って進む様子を「法の輪を転ず」（転法輪）と譬えて云います。

「きわもなし」とは「無辺際」、「いつの時代、どこの国の人も、どんな人も漏れなく照らす如来さまの光り」を讃えた言葉です。

「無辺光仏」「無碍光仏」とも云います。

「有無をはなる」。有見・無見、常見・斷見とも云います。

まず、有見とは、この私の命は、死んでも輪廻転生（生まれ変わり死に変わつて）ずっと生存する、という見解。無見（断見）とは、死んだらそれでおしまい、無に帰して何も無いと考える見解です。

あなたは天国へ行くのかそれともあなたは地獄にうまれるのか。願をかけたり祈つたり。いまのこの命にしがみついて、死ぬのはいやと一日でもこのいのちにしがみついていたい。とにかく今の生にこだわり今の自分の考えにこだわる生き方です。

反対に死んだらそれでおしまい、わたしの目に入らぬものは無いもの。死体はゴミ。あるいは今のいのちだけ。だから死ぬまでのこのいのちを楽しもう、という快樂主義にも通じる考え方です。

あなたはどちらの考え方でしようか。仏法ではどちらも間違った自分の勝手な考え方、偏見ではないのかと云います。

両方ともに偏見であり、「まよい」であります。たしかにわたし自身、「死」を目の前にし、日々我が身の生死に迷い、その時々に自分勝手な理屈を考えて生死の現実から逃げようともがいたりしている毎日です。

そのように迷うこの私を、眞実の光明（眞実明）は照らしつづけていて下さるのです。

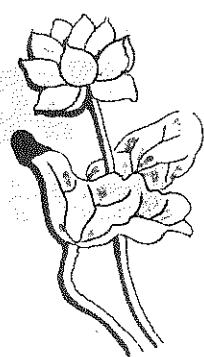
「眞実」ということばの左訓に「眞トイウハ、イツワリヘツラワヌヲ眞トイウ。実トイウハカナラズモノノミトナルヲ云ウナリ」

如来さまは、他人のようにおじょうずを云つてなぐさめたりごまかしたりはしない。

人はどうであれ、親だけはわが子の良いも悪いも承知のうえで呼んで下さるのです。この親の呼び声こそわたしの生き抜く力となつてくださるのであるという意味です。

「帰命せよ」。如来さまのおぼしめのそのままに、お任せしようではないか。

「せよ」は、命令ではなく勧誘です。お誘いです。あなたといいいいいつしょに自覚めようではないかと、誘つて下さるのです。



弘道館  
わたしが学んだ小学校は「弘道館小学校」であった。この学校に学んだことをなんとなく誇りに思っている。

そもそも「弘道館」とは、江戸時代にあった潘校。水戸・出石・佐賀・彦根などが有名。

その校名の由来は、論語「衛靈公第十八」に、子曰(のぞ)わく。人、よく道を弘(ひろ)む。道、人を弘(ひろ)むに非ず。

先生がおっしゃった。人がそれぞれ自分で工夫し努力してみて、自分の進むべき道が弘(ひろ)がっていくものだ。徳目や師の指示または道標などがあつてそれに導かれて道が拓かれるのではない。

(弘の字は弓のつるを力一杯引いている姿の形象文字という)

## 除夜会・修正会

### お参りください

今年も一年の締めくくりと新しい年のスタートをお寺の本堂とともにいたしましよう皆さんのお参りをお待ちしています。

仏事役員一同

### 除夜会

平成二十五年十一月三十一日

午後十一時より お勤め「正信偈」

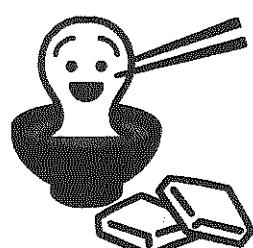
午後十一時半より 除夜の鐘つき

### 修正会

平成二十六年一月一日

午前零時過ぎ（除夜の鐘を突き終わり次第）

お勤め「重誓偈」  
法話



なお、境内で雑煮、甘酒、ぜんざい、お屠蘇などの接待があります。

十一月三日	葬儀
出合 生田 静子様 八十五歳	
正法寺 数森 幸枝様 八十八歳	

十一月二十日

暮坂 平野さかえ様 九十四歳

一二月 勝林寺 予定
一日(日) 小田 報恩講
四日(水) 兵庫教区 組長会 臨時総代会
五日(木) 東里・大田
六日(金) 出石組 実践委員会 関森敏昭宅 忌明法要
七日(土) 唐川 宮鳴寿賀雄宅 三回忌
八日(日) 出合 報恩講 総仏講
九日(月) 小田 報恩講
一〇日(火) 市場 報恩講
一一日(水) 中嶋敏博宅 一周忌
一二日(木) 野尻・矢根 報恩講
一三四日(土) 永井 實宅 一周忌
一五日(日) 口小谷 報恩講 総仏講
一六日(月) 東里 総仏講
一七日(火) 数森正彦宅 忌明法要
一八日(水) 口小谷 報恩講
一九日(木) 矢根 報恩講
二〇日(金) 丸中・片間 報恩講
二二日(日) 豊岡・鉢山 報恩講
二三日(月) 生田俊雄宅 忌明法要
二五日(水) 平野さかえ 忌明法要
二七日(木) 出石組 忘年会
三一日(火) みのりを聞く会 お餅つき 除夜会

(敬称略)

光雲無碍如虛空  
一切の有碍(うげ)にさわり

なし  
光沢かふらぬものぞな  
き  
難思議(なんじぎ)を帰命せよ

お淨土のほとけさまは、くまなく誰をも照らす「光り」のほとけさまです。そのほとけさまに出会うには、小賢(こわい)しい凡夫の智慧や、自分勝手な学問などを超えた不可思議な世界(お淨土)のほとけさまに帰命します。

この和讃は、親鸞さまの主著『顕淨土真実教行證文類』第五「真仏土」の巻に示した、淨土真宗のほとけさまとお淨土とを指摘し讃えて、和讃にうたつたものです。

「仏ハスナハチコレ不可思議光如來。土ハマタコレ無量光明土ナリ」と示されています。

お正信偈には、「帰命無量寿如來・南無不可思議光」とあるのはよくご存知です。

不可思議とか難思議とかいうことばは、つよく人間の思考や思想を否定した言葉です。何故でしょう。わたしたち人間凡夫の考え方や思いは、例外なく、狭い一人よがりの、わがみ勝手な偏見・盲見の類いばかりです。

「無明」(眞実が見えていない)。「渴愛」(利己中心的)ないわゆる煩惱の偏見に終始しています。もののほんとうの理には遠く、眞実は殆ど見えません。

それを「凡夫・煩惱の世界」と云い、「濁世」(ござき)「穢土」(えど)と云います。

「煩惱」、自分勝手な利己心。俗ないかたですが「利己的なソロバン勘定」で泥まみれなこの私たちの世界のことです。

それに対して如来さまの世界は、淨土です。自と他の区別。そのうえでの比較・対立、競争、闘争、憎み合い、蹴落としあいのドロドロした煩惱の世界、を超えた世界。「清淨な土」(淨土)それがほとけの世界です。その淨土へ救い上げたいとはたらくから、それが「無碍光」「無量寿」の如来様のはたらきです。

量り無い知恵の「ひかり」と、極まりない慈悲の「いのち」で、いつでもどこでもわたしを願いはたらいてくださる仏様です。

凡夫がよからんともあしからんともはからずとも、ただ「おおせのままと」およびこれにまかせる「自然」(じねん)のところ、それが淨土真宗でいう信心です。



## 二月の法話カレンダー

一切衆生を「御同朋」

### 存在

出典 富城 講「本願に生きる」

### 法話

(前略)なぜ世の中が混乱しているのか。なぜ自分が何者かわからないのか。それは、私が自分自身の根っこに張り付いて生きて

こなった結果ではなかつたか。わが身一つを自己として、わが身一つを世界として生きてきたことのつけが、暴力的な報復的世界を作り上げ、生物を根絶やしにする核物質を半永久的に存在せしめる原発を是認してきたのである。そこには、すべての存在は互いに尊敬し、慈しみ、分かち合つて

生きてある「御同朋」的存在だということに思いをはせるでもなく、むしろ他の存在を踏みつけてきた私の存在がある。そういう私の存在の集合体が経済至上主義的の社会そのものである。

そのような「我と我が世界」の現実を徹底的に知らしめる働きが仏の呼びかけとしての念仏である。その念仏に目覚め、念仏に生きることこそが「念仏者とは一切衆生を「御同朋」として見出していく存在」と

ところが私たちは、いま、私が見たり感じたり考えたりしていることやものが、「いつもかわらぬ世界」と見誤っている。「わたしの世界」を生きている。これが「迷妄・苦惱」のものと、苦惱・煩惱のものと。世界混迷の根源である。

そこからの「めざめ」「脱却」(ニルバ)の根源である。

そこから「涅槃」(ねばん)の道を示す

どすん

今年も寺の最大行事である「報恩講」を盛大にお勤めする」と

ができました。今年は、大遠忌法要をお勤めしましたから「最

大行事」という言葉が当てはまらないかもせんが、厨房

の大変さは、やはり遠忌以上です。二日間でのべ100食を賄う大変な厨房ですが、ご奉仕くださる皆さんに、悲壮感はなく(あつ、いや、ありました!なぜか炊飯器のスイッチが入らなくて、焦つて冷や汗が出ました!)手は、つねに軽やかに動きますが、口もよく動きます。作業の手順の確認は勿論、切り方、炒り方の伝授、時には、世間話にも花が咲きます。その厨房で、毎年のように話題になるのが、白和えを作つたあと、すり鉢の中に残るおいしい御馳走の話。すり鉢の溝には、白和えの一番おいしいところが、どうしても残つてしまします。いくらしゃもじでなでも取りきれません。そのまま洗つてしまうのは、なんとももつたない。。。そこで、その中にご飯を入れるのです。すると、うまい具合に、ご飯が溝の中の豆腐やゴマの残りを引つ張り出し、中でうまく絡み合います。甘くて香ばしいところとしたご飯の出来上がり!

「まあ、おいしい!」初めてお当番をしてくださつた方でも、この秘密の御馳走をいただくと、不思議な一体感が生まれるのです。おまけに、すり鉢の中は、残るもののが何もなくなります。一舉両得です(笑)昔の人たちの見事な知恵ですね。そんなこんなで、ときには、思いがけない御馳走をいただきながら、

楽しく作業をしていただきながら、作る方の気持ちがかくし味となるのでしょうか。勝林寺のお斎は、最高においしいです!(文責 坊守)